

昭和63年8月25・26日
留萌川
氾濫記録

前線
留萌性豪雨は
川を襲つた

昭和史最後の大洪水



留萌川流域の概要

黄金色に輝く夕陽、世界三大波濤の1つに数えあげられる冬の黄金岬（その他には英国スコットランドのウイック、インド南部のマドラスがあげられる）。

このような夏のやさしさと冬の厳しさをもつ日本海に、留萌川はゆるやかに蛇行しながら流れています。

その流域はすべて留萌市の行政区域となっており、このように1つの市町村を流れる1級水系は、北海道では留萌川のみであり、又、全国的にも例が少ないのです。（他の1級水系では、長崎県諫早市を流れる「本明川」のみ）

留萌川は、昭和47年に道内13番目の1級水系として指定された流域面積 270km²・幹線流路延長44kmの河川です。

留萌の地に和人が定着したのは、今から380余年前、松前藩が鮭・鱒を中心とした魚場として開拓されたのが始まりで、その後、明治時代に入り、「春告魚」とも呼ばれる鮭の群衆とともに活気を帯び、そのとき“潮が遡り水の流れが緩やかで静かな川＝ルルモッペ（留萌川）”は内陸へ向う唯一の交通路として大いに利用されたのです。

さらには、明治の後半から現在にいたるまで、豊かな水田地帯を維持する貴重な水の供給源として、留萌川は重要な役割を果たしており、次世代への新たな飛躍を目指してゆるやかにながれています。

留萌市の人口 34,130人
(昭和63年8月末現在)

洪水の歴史



水害年月日	概要
昭和14年7月28日～31日	前線にともなう大雨のため、宗谷、天塩、留萌、上川地方に洪水。
昭和22年8月15日～16日	大雨（留萌8月15日より2日 89.7mm）のため、留萌地方洪水氾濫。傷1人、行方不明1人、家屋流失3戸、家屋浸水230戸、橋流失13ヶ所。
昭和26年8月31日～9月4日	大雨（大和田9月1日より4日 261.4mm）のため留萌川氾濫。留萌市家屋全壊6戸 半壊31戸、家屋浸水1,181戸、河川欠壊4ヶ所、道路欠壊4ヶ所、橋流失16ヶ所、農地浸水1,520ha、土木被害額8,1百万円。
昭和28年7月31日～8月2日	前線による大雨（留萌7月31日より2日 181.1mm）のため留萌川氾濫。留萌市家屋浸水1,286戸、全壊4戸、半壊1戸、道路欠壊29ヶ所、河川欠壊21ヶ所、橋流失24ヶ所、国鉄留萌線・羽幌線欠壊、土砂崩れによる不通31ヶ所、農地被害938ha、被害額127.9百万円。
昭和30年7月2日～4日	低気圧による豪雨（大和田7月2日より127.7mm）で留萌川氾濫。留萌市家屋浸水986戸、農地被害400ha、道路欠壊3ヶ所、橋流失5ヶ所、国鉄留萌線・羽幌線不通。
昭和30年8月17日～21日	集中豪雨（鉢下8月17日より2日 201.4mm）で、留萌川全域氾濫。留萌市氾濫面積1,014ha、家屋全壊6戸 半壊15戸、家屋浸水3,135戸、農地被害1,882ha、道路欠壊33ヶ所、橋流失14ヶ所、被害額139.4百万円。
昭和36年7月24日～26日	梅雨本期による大雨（幌糠7月24日より2日 115mm）で留萌川氾濫。留萌市農地被害182ha、被害額15.3百万円。
昭和37年8月3日～5日	台風9号（温帯低気圧）による大雨（鉢下8月2日より2日 113mm）で留萌川氾濫。留萌市氾濫面積62ha、農地被害244ha、被害額13.6百万円。
昭和38年10月1日～2日	集中豪雨（鉢下10月1日～2日 155.0mm）で留萌川氾濫。留萌市家屋浸水86戸、農地被害320ha、7.0百万円（農地のみ）。
昭和39年8月16日	集中豪雨（幌糠8月16日 82.0mm）で留萌川氾濫。留萌市家屋浸水185戸 農地被害172ha、道路・河川欠壊2ヶ所、被害額18.7百万円。
昭和40年9月17日	台風24号による大雨（留萌9月17日より2日 88.6mm）で留萌川氾濫。留萌市家屋浸水139戸、農地被害250ha、道路・河川欠壊2ヶ所、橋梁流失3ヶ所、被害額17.0百万円。
昭和48年8月17日～18日	集中豪雨（大和田8月17日より2日 122.5mm）で留萌川氾濫。留萌市家屋全壊1戸 家屋浸水132戸、道路・河川欠壊2ヶ所、治山被害7ヶ所、被害額9.4百万円。
昭和50年8月22日～23日	台風6号による大雨（鉢下8月22日より2日 171.1mm）で留萌川氾濫。留萌市家屋浸水44戸 農地被害219ha、道路欠壊1ヶ所、河川欠壊9ヶ所、橋流失1ヶ所、被害額258.0百万円。
昭和50年9月7日～8日	低気圧による集中豪雨（大和田9月7日より2日 99.4mm）で、留萌川氾濫。留萌市家屋浸水91戸、農地被害355ha、道路欠壊1ヶ所、河川欠壊9ヶ所、橋流失5ヶ所、被害額101.7百万円。
昭和56年8月3日～6日	前線による大雨（タルマップ8月3日より3日 293.0mm）で留萌川全域氾濫。留萌市家屋浸水220戸、半壊1戸 農地被害504ha、河川欠壊44ヶ所、道路欠壊58ヶ所、橋流失10ヶ所、被害額641.7百万円。
昭和63年8月25日～26日	前線による豪雨（鉢下 371mm/2日 幌糠 350mm/2日）で、留萌川全域で氾濫、留萌河口観測所では計画高水位を1.40m上まわる6.00m（8月26日10時）に達した。留萌市家屋浸水3,376戸、農地被害623ha、道路欠壊74ヶ所、河岸欠壊46ヶ所、橋流出10ヶ所、氾濫面積1,290ha。

昭和63年8月 前線性豪雨

“濁流”

8月25日 10:20 大雨注意報発表

14:40 大雨雷注意報に更新

18:00 大雨雷洪水注意報に更新

この間の降雨状況は、中上流部では14~16時の各1時間に20~30mm程度の強い雨は降ったものの、その後は小雨となりました。

19:15 大雨洪水警報発表

その直後、中流部の大和田観測所では、19~20時で38mmを記録、さらに、20~21時には上流部の岬下・幌森観測所で、それぞれ82mm、63mmという豪雨を記録したのです。

この短時間豪雨は、一気に留萌川へ流れ込み、中上流部では20~21時で水位が約1.4m、特に幌森では21~22時で2.13mと急上昇し、短時間のうちに指定水位・警戒水位を突破しました。

この時刻から中・上流部では外水氾濫が始まり、住民は着の身着のまま避難はじめたのです。

その後も雨はふり続き、中上流部の観測所では、25日夜半から26日未明にかけて、水位観測可能高を越えたため、観測所機器による測定は不能となったのです。

又、留萌市の人口の約95%が集中する下流部では、25日夜半より始められた総勢1,000名以上にわたる必死の水防活動にもかかわらず、26日早朝、完成堤防を越え、市街部へ氾濫し始めました。

北海道 水害 地震 地下 洪水 (タリ)

留萌、空知中心



留萌市に災害
救助法を適用
留萌市役所
山手のまーく



8月26日 AM

KP 2.2(左岸) 高砂排水機場付近

堤防越水状況

左岸 KP 2.0~2.7 L = 800m

右岸 KP 2.0~2.7 L = 690m

堤防越水時間

約6時間

“泡 濫”

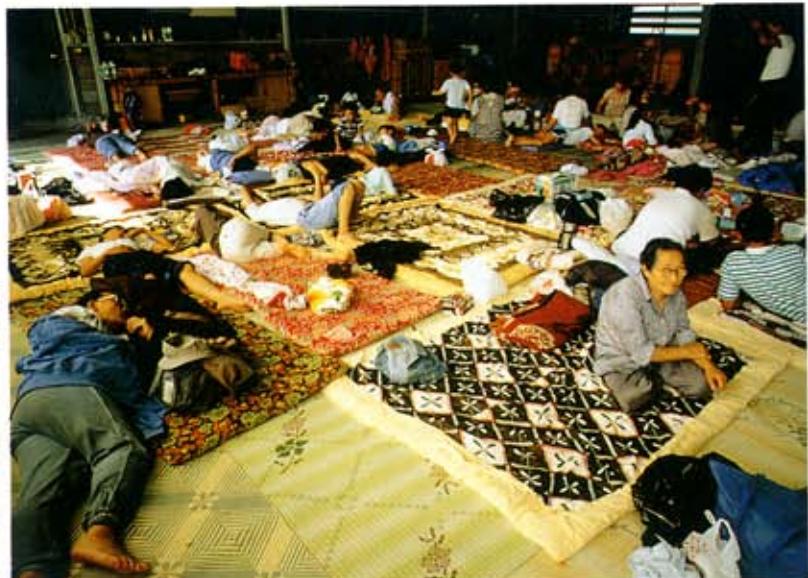
昭和63年 8月 前線性豪雨

▼市街地下流



▲水防活動

▼避難先の住民



▼市街左岸 南9条橋下流(KP3.5)



対策本部・避難命令

北海道開発局「8.25前線性豪雨北海道開発局災害対策本部」

8月25日 22 00設置

留萌開発建設部「留萌開発建設部災害対策本部」

8月25日 22 00設置

留 萌 支 庁「北海道大雨災害対策留萌地方連絡本部」

8月26日 3 45設置

留 萌 市「留萌市災害対策本部」

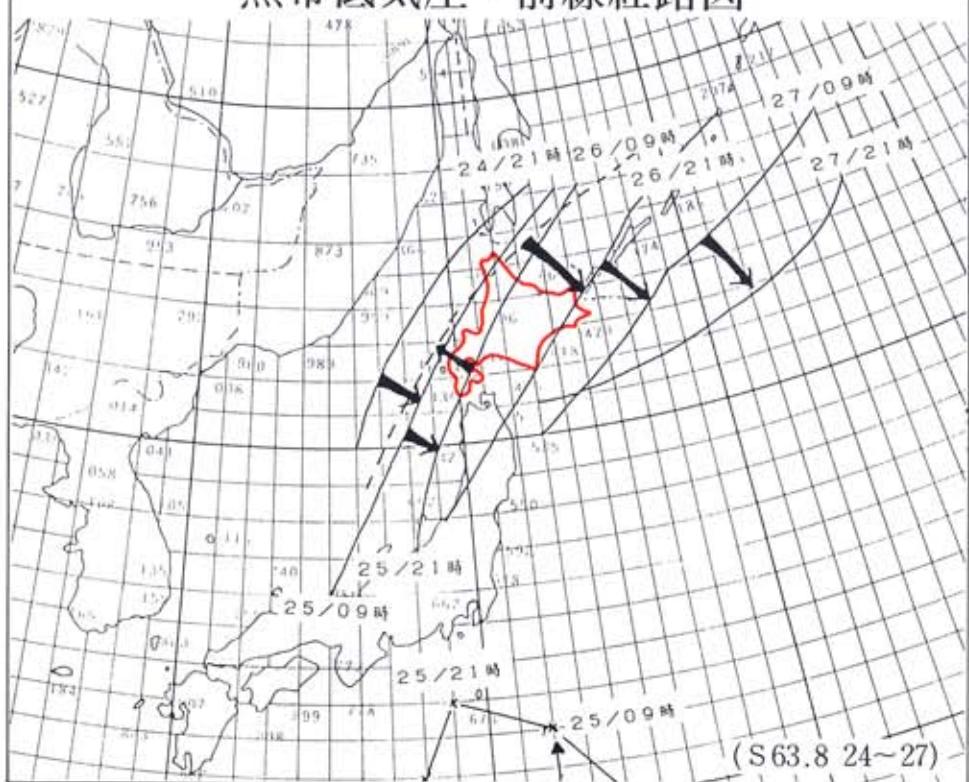
8月25日 19 30設置

地 区 名	避 難 命 令	避 難 場 所	開 設 日 時	閉 鎮 日 時
藤 山 地 区	25日 22 00	藤山改善センター	25日 21 30	8月29日 18 00
大 和 田 地 区	26日 0 15	大和田生活館	25日 23 45	8月28日 16 00
元 町 全 域	26日 0 20	港北コミュニティセンター	25日 23 50	9月1日 16 00
*	26日 0 20	北光中学校	25日 23 50	当初より未使用
*	26日 0 20	春日児童館	25日 23 50	
幌 種 市 街	26日 2 15	幌種農協	26日 1 45	8月28日 9 00
南 町 一 部	26日 3 33	東部地区公民館	26日 3 00	8月28日 9 00
五 十 嵩 ・ 高 砂	26日 3 33	緑ヶ丘小学校	26日 3 00	8月28日 9 00
末 広 ・ 東 薩 司	26日 3 33	留萌工業高校	26日 3 00	8月28日 9 00
*	26日 3 33	留萌中学校	26日 3 00	8月27日 18 00
*	26日 3 33	東光小学校	26日 3 00	8月28日 9 00
堀 川 町	26日 3 33	留萌開発事務所	26日 3 00	8月27日 18 00
高 砂 町	26日 3 33	消防本部	26日 3 00	8月28日 9 00
末 広 ・ 開 通 町	26日 3 33	中央公民館	26日 3 00	8月28日 9 00
栄・錦・明元町	26日 3 33	スポーツセンター	26日 3 00	8月29日 17 00
*	26日 3 33	消費生活センター	26日 3 00	8月29日 17 00
計		16 力 所		

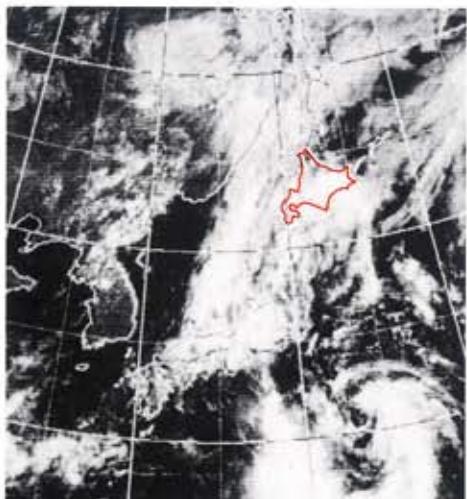
気象概要

(下記雨量は気象台観測値)

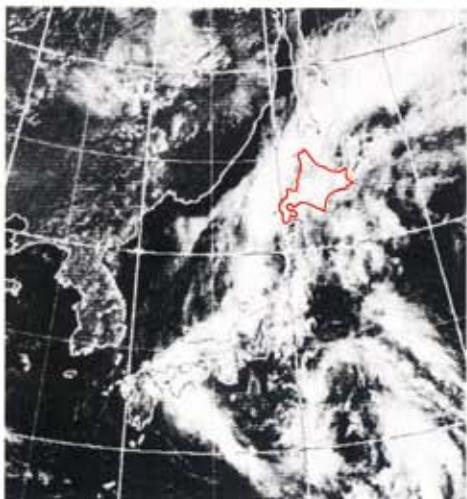
熱帯低気圧・前線経路図



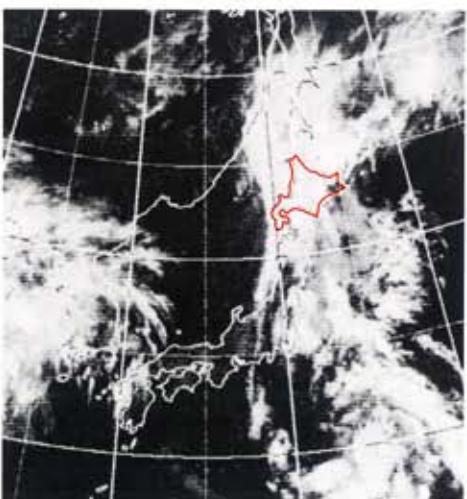
▲23日13時撮影



▲24日13時撮影



▲25日13時撮影



▲26日12時撮影

北海道の東方海上には、北太平洋高気圧が北海道に張り出し、この影響で8月23日までは道内各所で30度を超す暑さが続いていました。しかし、日本海に気圧の谷が進み、24日の15時には、宗谷海峡の西から秋田沖に南北にのびる停滞前線が発生したのです。この北海道の西海上に停滞していた前線に、関東沖の熱帯低気圧から高温多湿な空気が流れ込んだため、前線の活動が活発になり、24日夕方には渡島地方から留萌地方にかけての日本海側で雨が降り出しました。

停滞前線はゆっくり南東に移動して、25の昼すぎには北見、枝幸から留萌地方を通り積丹半島の沖にかかったころ、高さ10,000m前後の強い雨雲が渡島半島の西海上から積丹半島および留萌地方にかけて次々と流れ込み、留萌地方は14時からの1時間に20mmから30mmの強い雨が降り出しました。

その後、雨は小雨になったものの、留萌地方南部から中空知・北空知地方を中心に、19時以降雷を伴った強い雨が再び降り続きました。

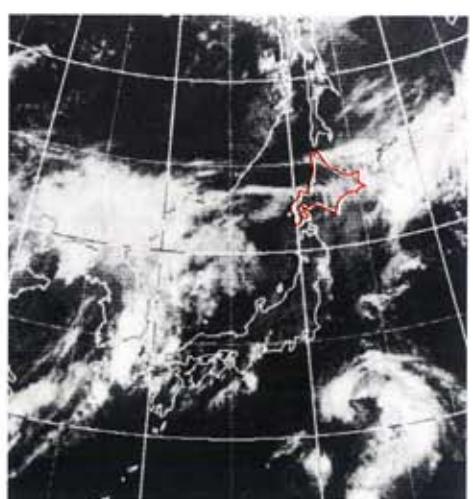
特に集中して強く雨が降ったのは、19時から21時までの間で、1時間に60mmを超える激しい雨が降ったのです。

この結果、留萌管内幌糠（気象台）では25日20時、21時には1時間降水量がそれぞれ62mm、63mmと記録的な短時間大雨を観測し、19時から22時までの3時間に166mmとなり、26日1時以降、アメダスは故障となりました（24日1時から26日1時までの総雨量 261mm）。

留萌管内幌糠・空知管内桜山・沼田・石狩管内新篠津では1時間に50mm以上の記録的短時間大雨を観測したのをはじめ、北海道西部の11カ所のアメダス観測所で1時間降水量の記録（昭和54年から統計しているアメダス観測値）をぬり替えるなど、かつてない大雨となったのです。

24日から27日までの降水量は、留萌地方の南部から空知地方にかけて200mmを超え、空知管内沼田では425mm、桜山264mm、幌加内232mm、美唄218mm、留萌管内達布204mmなどとなりました。

その後前線は、25日から26日にかけゆっくりと東に移動し、27日朝には本道の東へと抜けました。



▲27日13時撮影

(札幌管区気象台提供)

流域平均雨量 “325mm”

(上記数値は大和田上流域)

8月25日、峠下・幌糠・大和田の各観測所における19~20時の間の雨量は、それぞれ21、58、38mmを記録。さらに20~21時で82、63、34mmという豪雨を記録しました（気象台アメダスデータ【幌糠】では19時50分~20時00分で19mm/10 min）。

このような中上流域に集中した降雨により、水位は1時間に1m以上もの上昇を続け、特に幌糠では2.13m（21~22時）という急上昇でした。

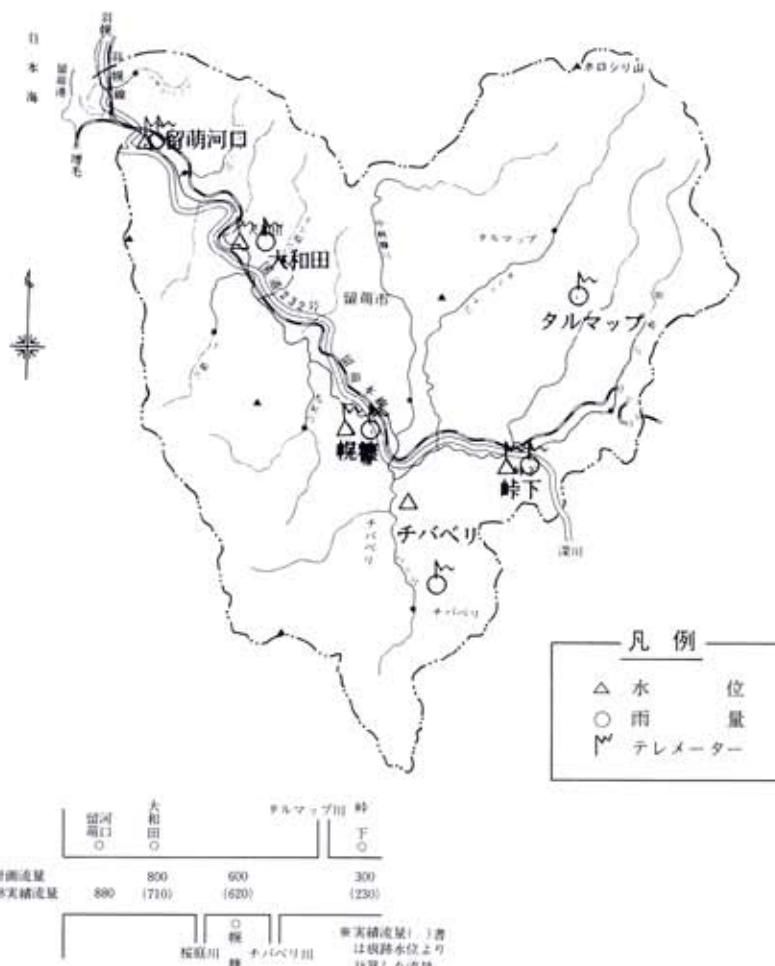
観測所	指定水位 (A) 発生時刻	警戒水位 (B) 発生時刻	(A) - (B)
峠下	21 01	21 42	41 min
幌糠	20 38	21 07	29 min
大和田	21 09	21 42	33 min
留萌河口	21 24	22 00	36 min

注) 発生時刻については自記紙からの比例計算による推定

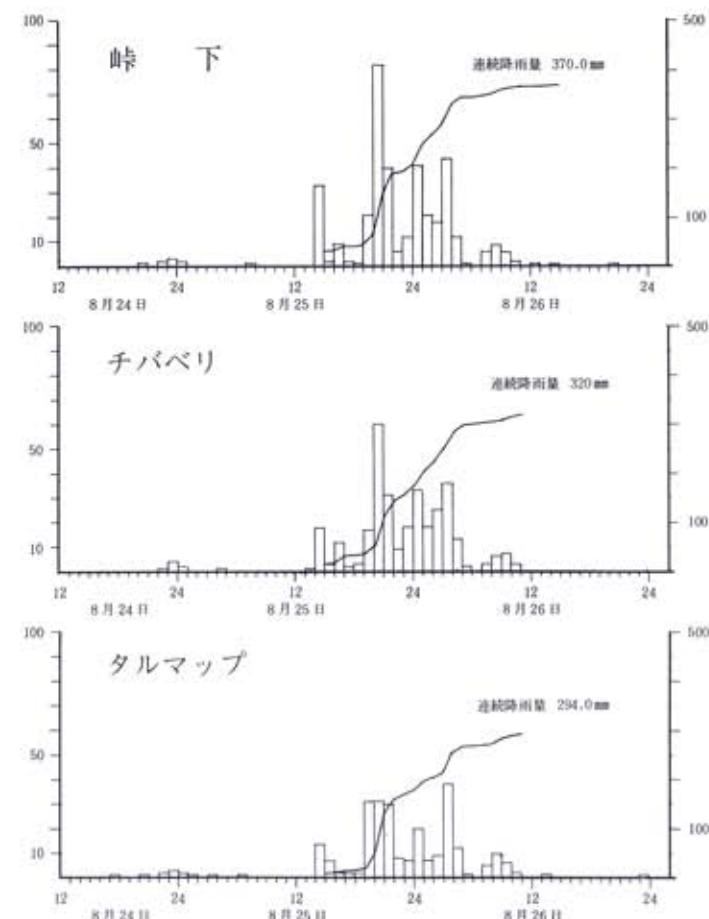
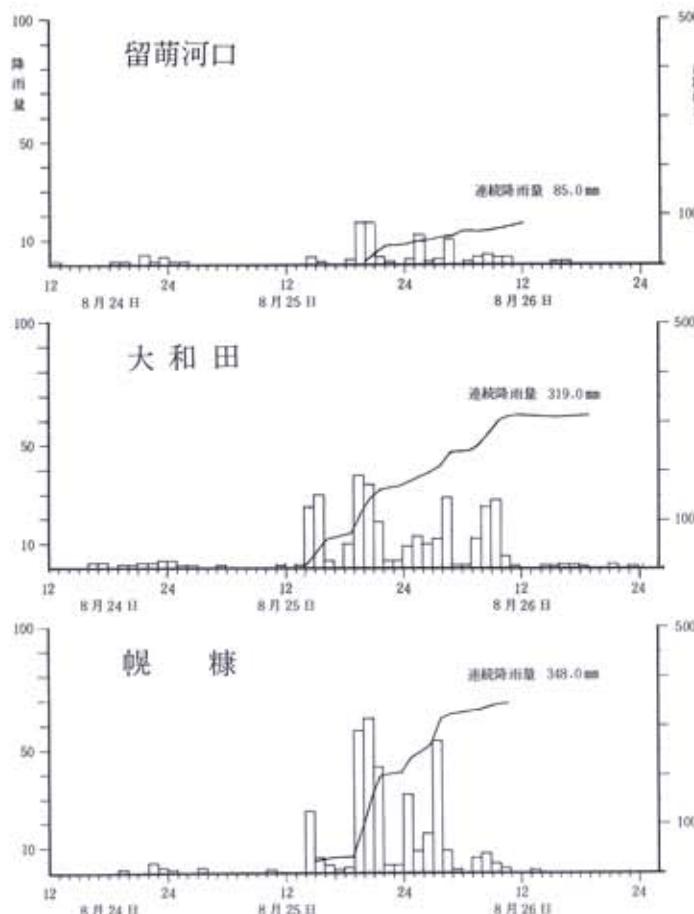
流域に、10mm/h以上以上の雨が降り始めたのは、25日の19時以降であり、それからわずか2時間後には指定水位に、その約30分後には、警戒水位に達したのです。

又、他地点より早い時間に指定、警戒水位に達している幌糠観測所は、直上流に大きな支川（中幌糠川、チバベリ川、タルマップ川）をかかえており、これら支川からの流出が早かったため上表のような結果になったと想定されます。

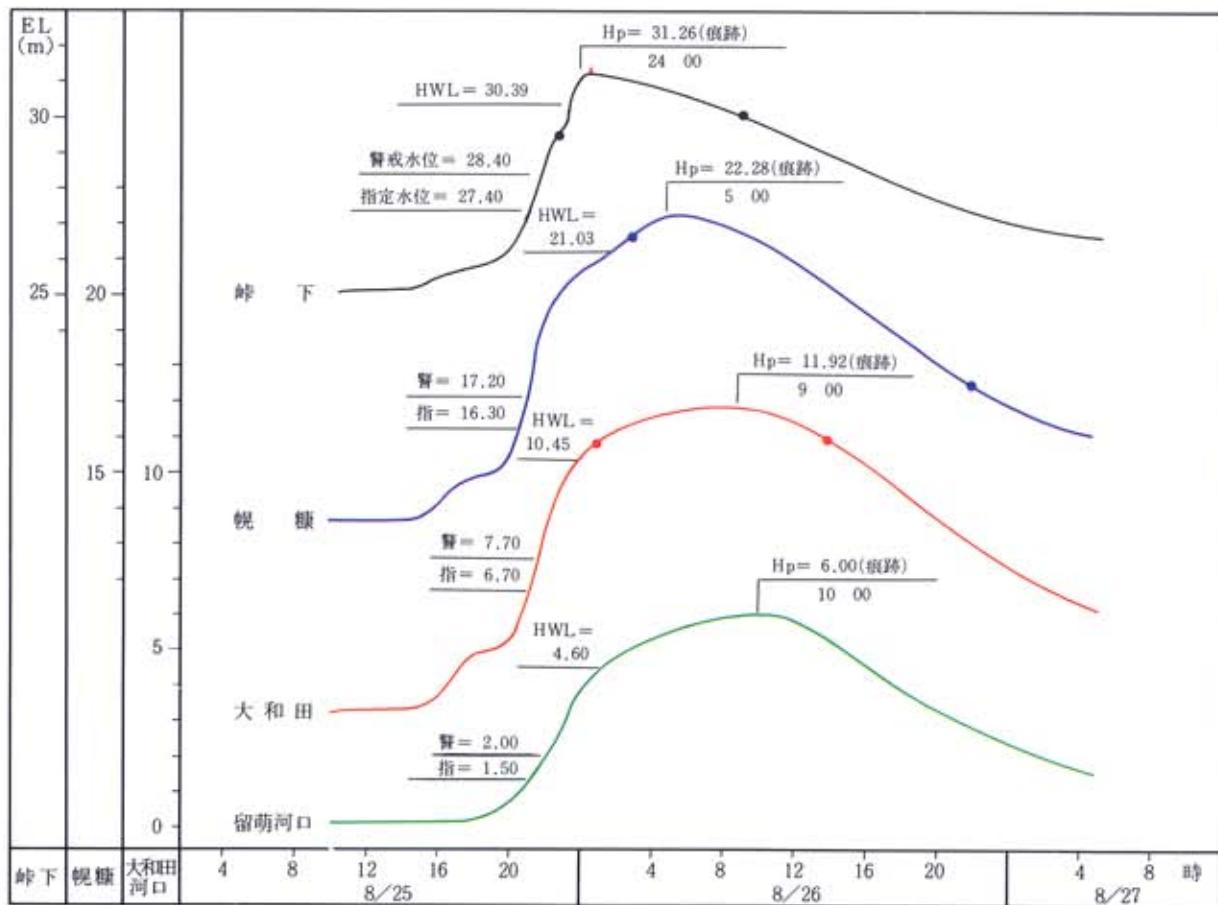
観測所位置図（留萌開発建設部）



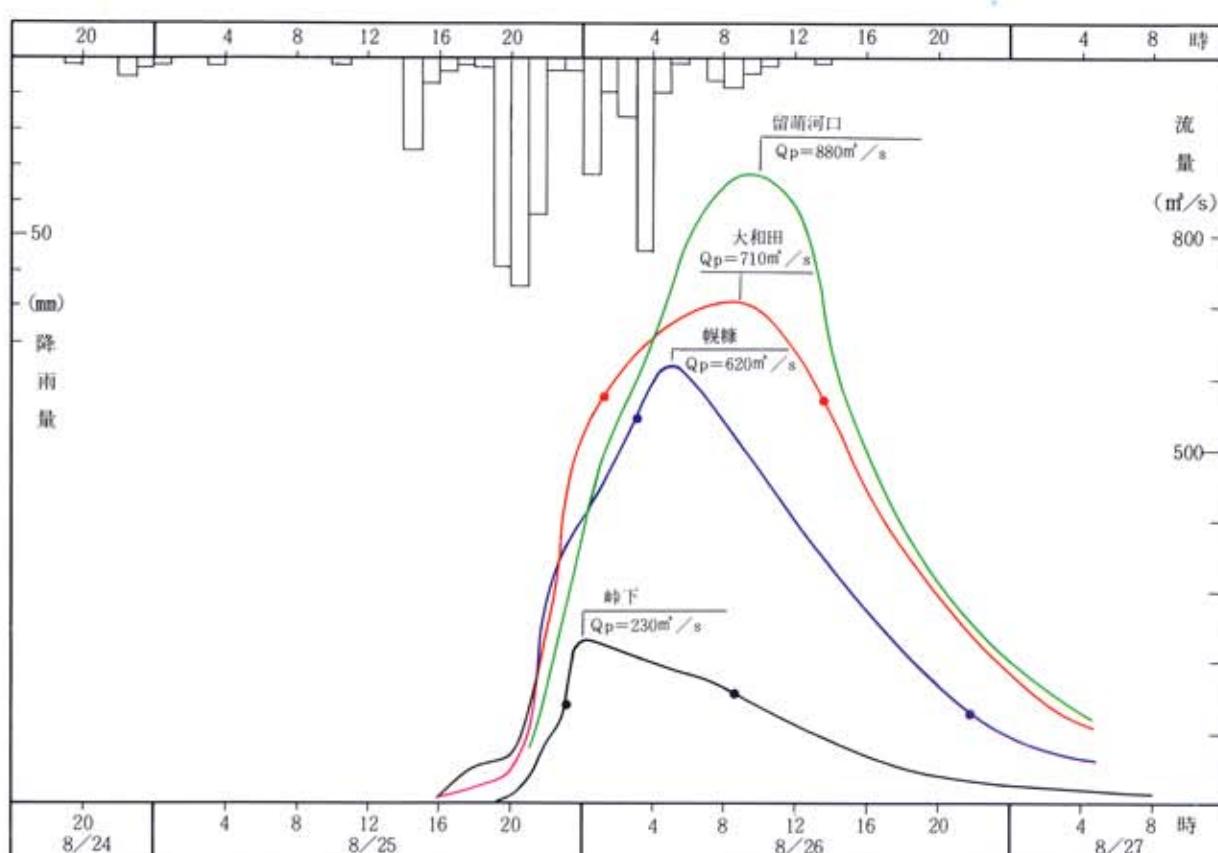
1. 雨 量



2. 水位



3. 流量



豪雨は起こりうる

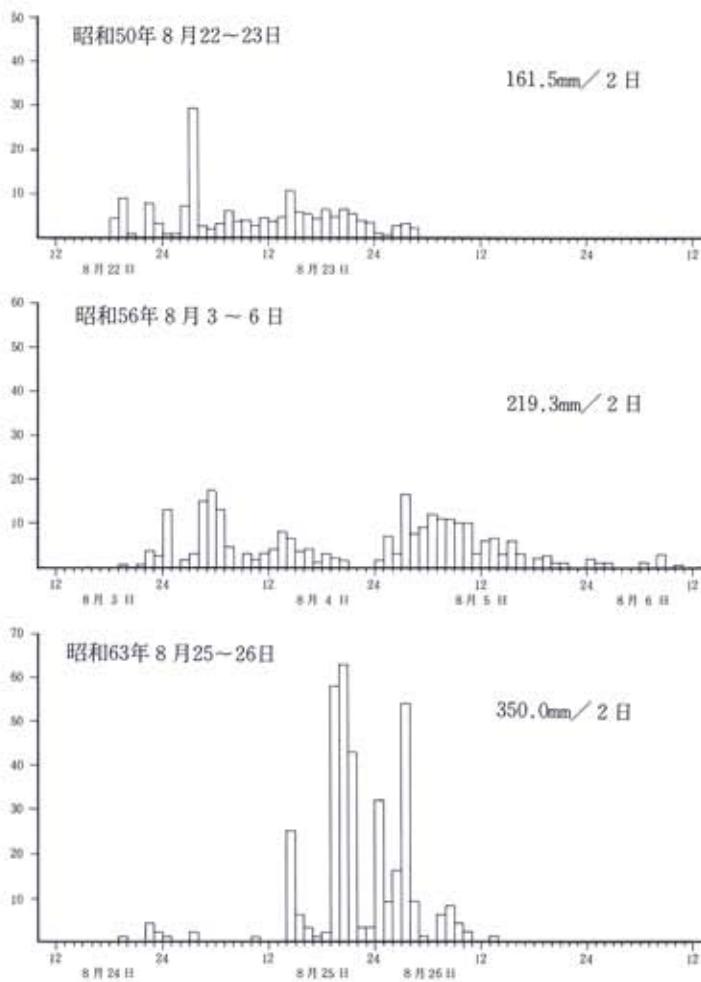
北海道を右図に示すように、留萌川の流下方向であるA-A断面で切断し、この断面における代表洪水の総雨量状況を比較すると、昭和50年8月、56年8月上旬洪水は、雨竜川と石狩川の分水嶺付近で最大値を占めており、又、総雨量の最大と最少の差は、50~100mm程度ですが、昭和63年8月洪水においては、留萌川と雨竜川の分水嶺付近に極端的に集中しており、その最大と最少の差は350mm程度と極端になっています。

留萌川流域における年平均降水量は1,606mm（大和田観測所 S 53~62、10カ年平均）ですが、この約20%が、昭和63年8月25・26日の2日間で降ったことになります。

さらに、今回洪水は、総雨量が大きかったのみでなく、過去の降雨パターンと比較し、極めて単時間集中型であり、これが、山間地河川である留萌川流域に激甚な被害を与えたのです。

このような極端集中型の降雨については、その流域に与える影響を考えると、今後の対応が必要とされるところです。

幌糠観測所雨量比較



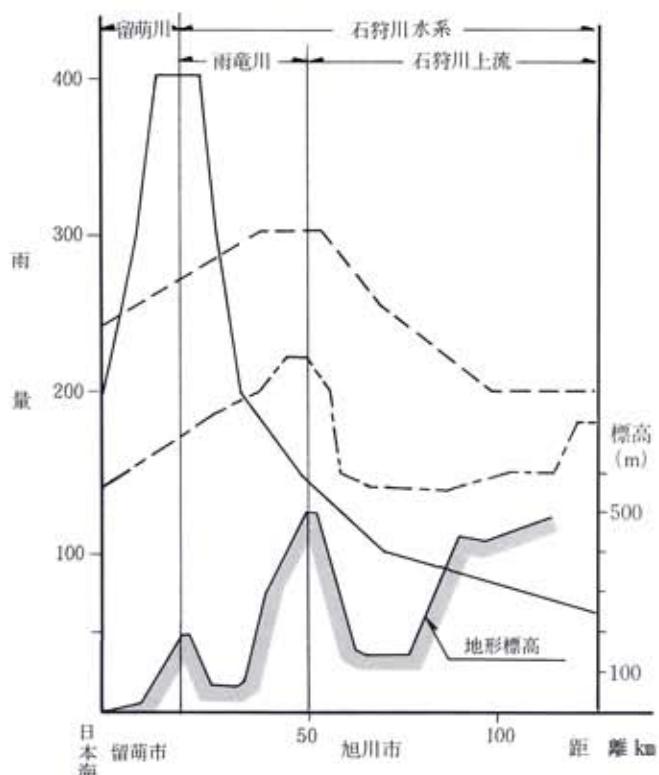
降雨量の比較

幌糠観測所

雨量 代表洪水	1H雨量	日雨量	2日雨量
昭和48年 8月17~18日	8.5mm	51.5mm	91.5mm
昭和50年 8月22~23日	29.2	83.0	161.5
昭和56年 8月3~6日	17.5	137.3	219.3
昭和63年 8月25~26日	63.0	343.0	350.0



総雨量縦断分布



水文関係比較一覧表

項目	観測所名		留萌河口	大和田	幌糠	峠下	チバベリ	タルマップ
	S	1 H	19~20時 25日17mm	19~20時 25日38mm	20~21時 25日63mm	20~21時 25日82mm	20~21時 25日60mm	20~21時 25日81mm
63	2日雨量	mm	87	331	350	371	320	296
.	計画高水位	m	4.60	10.45	21.03	30.39	—	—
8	実績水位(痕跡)	m	6.00 (11.92)	(22.28)	(31.26)	—	—	—
月	実績流量(痕跡)	m³/s	880 (710)	(620)	(230)	—	—	—
洪	氾濫戻し流量	m³/s	—	—	—	—	—	—
水	計画流量	m³/s	800	600	300	—	—	—
S	1 H	—	6~7時 5日13.5mm	5~6時 4日17.5mm	6~7時 4日18.0mm	3~4時 5日17.0mm	3~4時 5日23.0mm	—
56	2日雨量	—	169.4	219.3	225.7	227.0	208.5	—
.	実績水位	—	11.60	20.53	30.35	—	—	—
8	実績流量(痕跡)	—	488	442	103	—	—	—
洪	氾濫戻し流量	—	—	—	—	—	—	—

留萌河口

流出土砂量 48万m³

流域における生産土砂は、河床に堆積、あるいは洗掘を受けながら、河口に到達し、河川の流水エネルギーと沿岸潮流エネルギーに左右されて、河口付近に堆積、あるいは海へと拡散していきます。

流域における生産土砂量は、種々の計算式（佐藤、吉川、芦田、レイン・カリンスキなど）より求めることができます。潮流による堆積・洗掘の影響をうけるために、実際の量を確認することは難しいといえるでしょう。

又、1洪水における流出土砂量の経験式は、芦田・奥村によると

$$D = K' \cdot (A R_a I_{200})^2$$

D 豪雨時流出土砂量 (m³)

A 流域面積 (km²)

R_a 最大日雨量 (mm)

I₂₀₀ 対象地点から標高200mの区間の河床勾配

K' 定数 (≈ 10)

で表されます。

ここで、それぞれ A = 270 km²、R_a = 360 mm (峰下日雨量)、I₂₀₀ = 1/477 (I₂₀₀ = 直轄区間最上流の計画河床勾配と仮定) を代入すると今回洪水における流出土砂量は D ≈ 42万 m³ と計算されます。

留萌開発建設部留萌港湾建設事務所では、S63.8月洪水前後にあたる8月7~10日、9月15~16日に深浅測量を行っていました。

そのデータにより、今回洪水における測量範

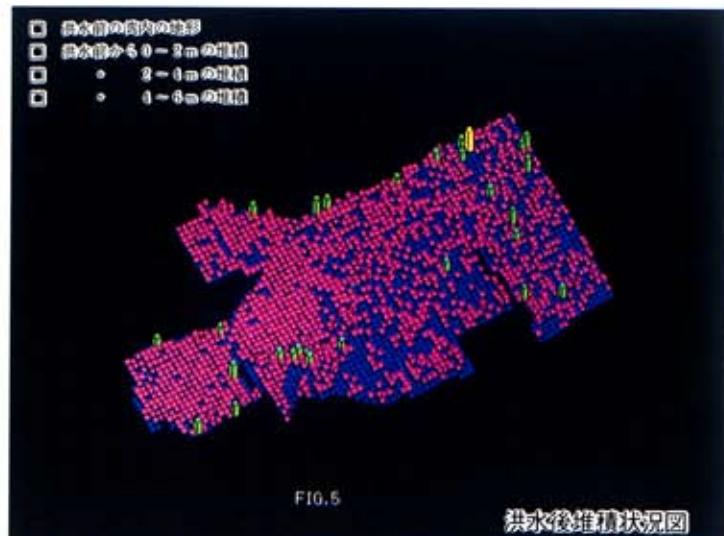
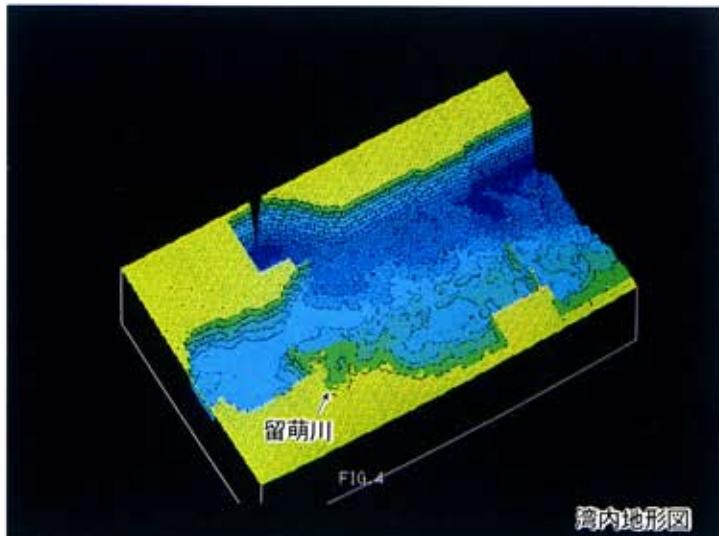
囲内の堆積土砂量を計算すると

$$V = 479,966 m^3$$

という量になります。

又、留萌川流域の氾濫域 (1,290ha) では、50cm以上の土砂堆積個所もあり、これら氾濫域全体に1cmの土砂が堆積したと仮定するとV ≈ 13万 m³、さらには、海へ流出した潮流の度合から浮遊砂の流出などを考えると、今回洪水における総流出土砂量は軽く60万 m³を越すものと想像されます。

これら洪水前後のデータは、非常に貴重なものであり、今後の解析検討が期待されるところです。





留萌川の語源「ルルモッペ」 = “潮が過るように、留萌川は蛇行が極めて著しく、そ毎年のように氾濫を繰り返し、流域に多くため、約2kmにおよぶ河口の新水路工事（かけて、大小16ヶ所の捷水路工事が行われ）の低下はもとより、土地の有効利用が図ら

大和田 塩州橋の落橋

大和田地区 (KP 7.8~10.0) では、大規模なショートカットが計画されています。

当地区は写真-3のように河道の蛇行が激しく、改修未着手であることから昭和56年8月洪水においても大きな被害を受けていたのですが、今回洪水はこれを上回り(大和田観測所 水位 S63痕跡 = 11.92m > S56痕跡 = 11.60m, HWL = 10.45m)、あらためて治水事業促進の必要性を感じます。

洪水後における地上の痕跡を見ると(写真-3)、河道の蛇行とはあまり関係なく直線的に流下した様子が認められます。

又、これらの洪水流は、KP8.0~8.4の蛇行部で河道に落ち込み、さらには流水が集中したため河岸はもとより塩州橋をも欠壊させたのです。

ツトの歴史

り水の流れが緩やかで静かな川”で示される屈曲も数えきれないほどでした。そのため、の被害を与えてきたのです。これを解消する大正6~12年)を始めとし、昭和35~50年にました。これらの捷水路工事により、洪水位れたのです。



写真-4

写真-5

幌糠押し寄せる流木

当地区は、留萌川の中流部に位置し、背後には豊かな水田地帯が開けています。幌糠市街部 (KP18~19.8) 直上流には留萌川が迂余曲折しながらチバベリ川と合流しており、当地区にも、チバベリ捷水路 (KP20.3~20.8)、幌糠捷水路 (KP19.3~19.7) が計画されています。

今回洪水においては、写真-5で示されるように河川流が河道の蛇行に堪えきれず、直線的に水みちができています。そのため、上流から流れてきた流木は、明治橋に乗り上げ、幌糠市街部に大きな傷跡を残しました。

峠下欠壊巾は35m

留萌川の河岸土質はシルト質が主体であるため、裸地部分は中小洪水でさえも河岸を大きく洗掘させるのです。又、蛇行の多い留萌川は、いたるところに水衡部を生じており、そのため、護岸工事は流域資産を守る上でも非常に重要な事業の1つに上げられます。

しかし、今回洪水においては、その流量、流速の激しさのため、河岸植生はもとより高水敷の樹木も含め、根こそぎ下流へ押しながしたのです。KP24.0地点では、その河岸欠壊巾は、約35mにも及びました。



写真-6



写真-7

昭和63年8月前線性豪雨

“氾濫”

▼大和田(KP9)一面水没



▼川北右岸 荣萌橋下流(KP2.8)



▼市街地下流



▲市街左岸(KP2.1)



▼市街部 浸水状況



▼藤山 国道233号の水没



▼川北右岸 排水ポンプ車による内水排除



▲必死の水防活動



▼市街部 水没状況



▲市街部 水没状況

▼市街左岸 荣萌橋上流 (KP2.8)



低平地の67%が氾濫

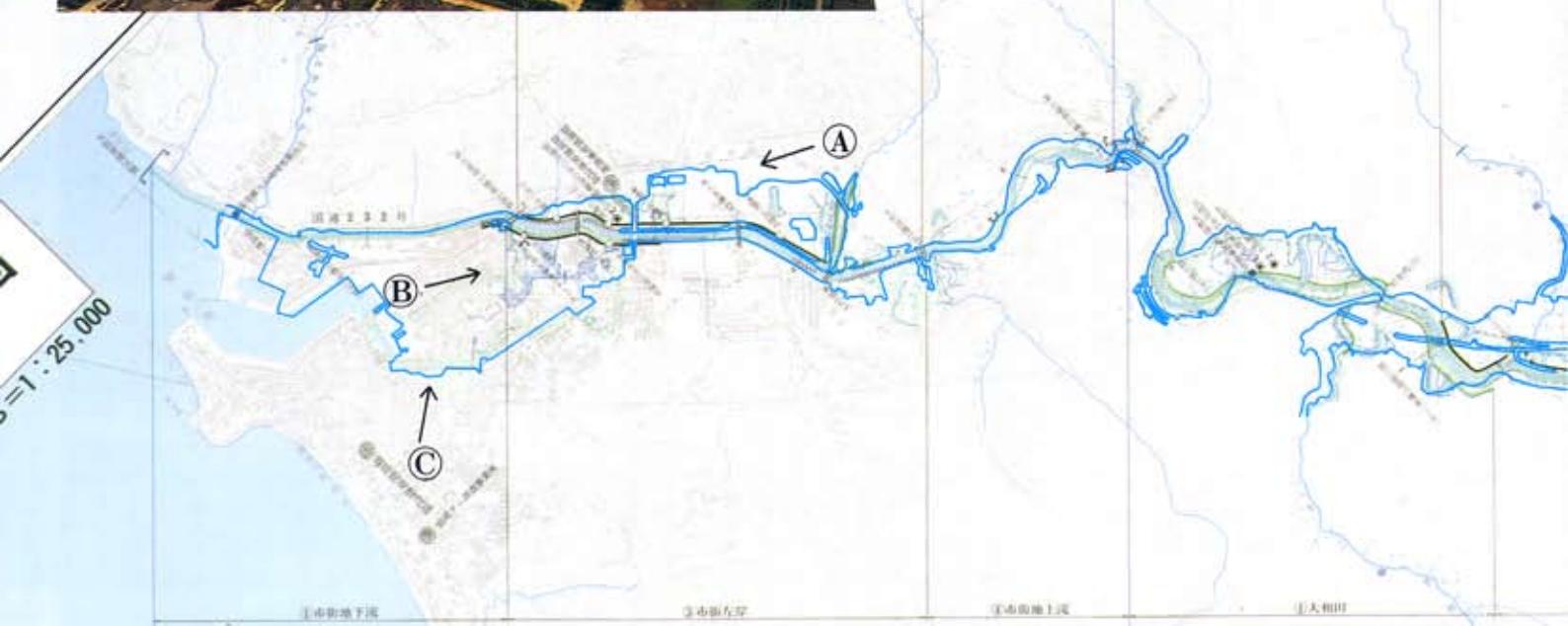
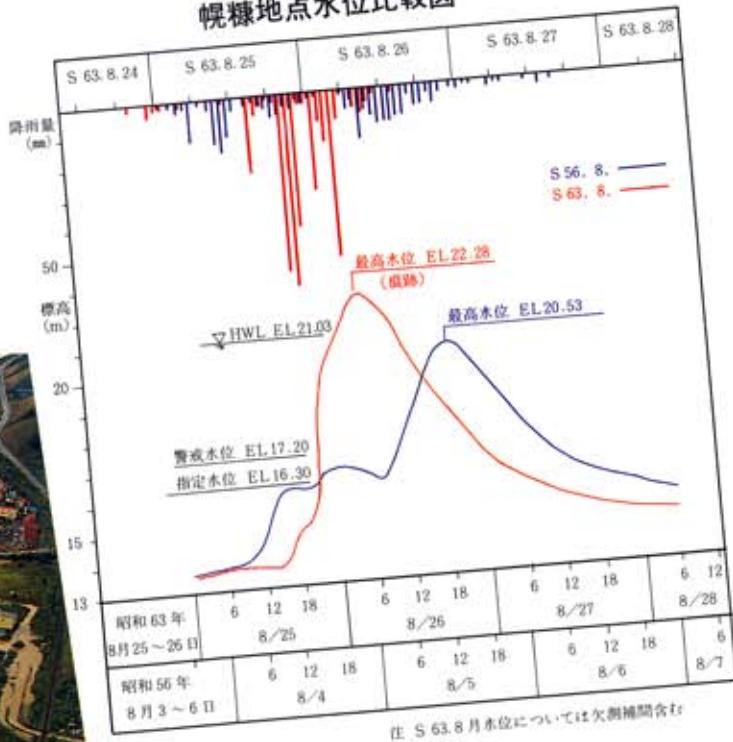
留萌川流域は、比較的標高の低い（250～350m）山地が連なっており、留萌川はその山地の間をぬうように蛇行しながら流下して日本海に注いでいます。

“流域面積 270km²、山地面積 232km²” このように約86%が山地であり、平地面積はわずかに38km²という代表的な山間地河川です。

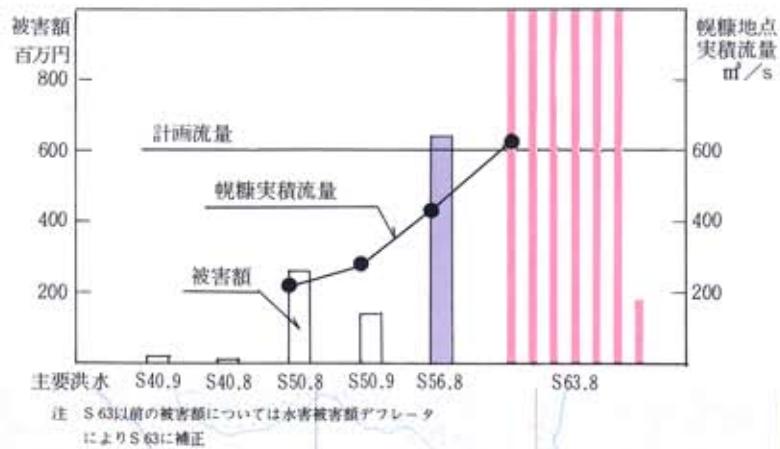
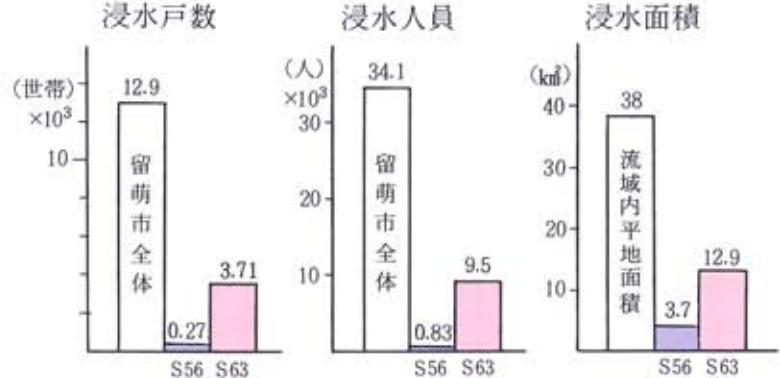
このうち、比較的標高が低く、農耕地・宅地などにして利用が可能な区域を低平地と表現すると、流域内の低平地面積は約1,930haで、今回洪水の氾濫面積 1,290haは、この低平地面積の約 67%にも相当するのです。



幌糠地点水位比較図



浸水戸数



流域被害 61.8 億円

留萌市調

より便利に、生活しやすくなった現代社会では、直接的、間接的にその流域資産を拡大させています。これを逆に言うならば、一度の洪水等の自然災害により、膨大な被害を与える可能性を秘めているということにほかなりません。

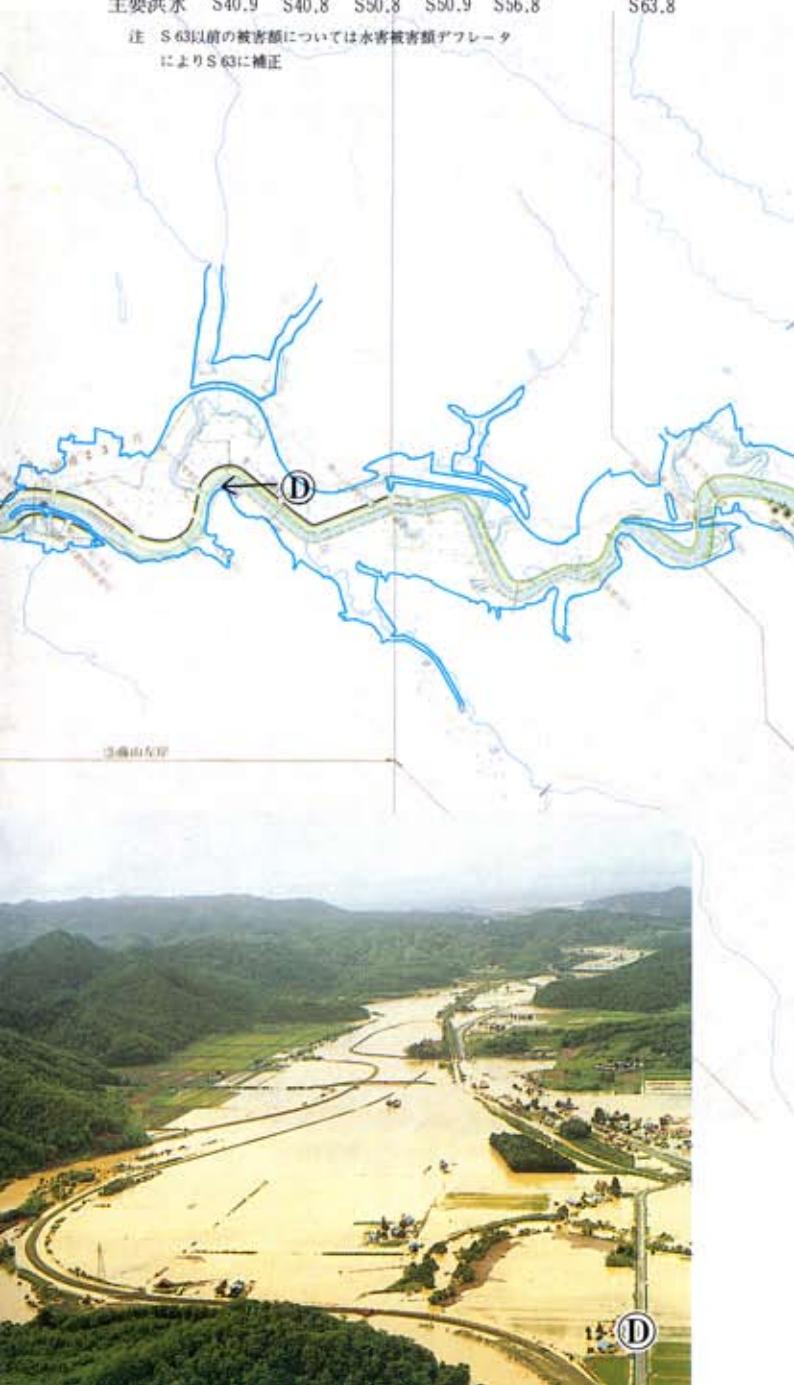
昭和63年8月前線性豪雨は、留萌市全域の住民に不安と恐怖を与えたのみならず、多くの傷跡を残していきました。

その被害状況（国営の施設被害は除く）は

住宅被害	10.3億円
農業被害	6.2 億円
土木被害	7.8 億円
水産被害	0.5 億円
林業被害	13.1 億円
商業被害	20.0 億円
その他	3.9 億円
計	61.8億円

です。

しかし、これはあくまでも直接的な被害であり、農業・水産・林業などの来年の収穫の影響、あるいは、従来の生活にもどるまでの住民の支出や、生活様式等を考えると、いかに水害というものが恐ろしいかを再認識ざるを得ません。



傷 跡

8月25～26日、実質わずか1日の洪水は、流域に大きな傷跡を残していきました。



▼市街左岸



▲藤山右岸

▲大和田 塩洲橋

▼藤山右岸



▼幌 糸



▼藤山右岸



▼幌 糸





▼緊急復旧事業による護岸



▼激甚災害対策特別緊急事業による河道掘削

積極的な“河川改修”

昭和63年8月前線性豪雨は、留萌川流域に怒濤のごとく押し寄せました。しかし、官民あわての総勢1000名以上にわたる必死の水防活動や救助活動を始めとし、高砂排水機場（留萌市）・排水ポンプ車（北海道開発局）による内水排除などにより、洪水による負傷者を出すことなく、その被害を最小限に止めたのです。

又、その一部が欠壊した堤防は、緊急復旧事業により、わずか10日程度で護岸を施工し、2次災害にそなえました。

さらに、留萌川下流部においては、今回洪水をふまえ、激甚災害対策特別緊急事業による河川改修が積極的に押し進められるのです。

激甚災害対策特別緊急事業

洪水・高潮・土石流等により激甚である一般災害が発生した地域について、河川改修事業、砂防事業などの各事業を緊急に実施するための制度。



完成が待ち望まれる“留萌ダム”

留萌川は、昭和47年に1級河川の指定を受け、昭和49年3月『留萌川工事実施基本計画』が定められました。この計画の中で、上流にダムを建設し、留萌川沿川の洪水を防衛する必要があることが明らかになりました。それに伴い、留萌川の支川チバベリ川を候補地として昭和49年度から予備的な調査が始まり、昭和59年度からは実施計画を立てるための具体的な調査を行ってきました。

留萌ダムは建設省直轄の多目的ダムとして、洪水防衛の他にも、生活水準の向上、水産加工業の発展に必要な水道用水を供給します。また、留萌川の流量を安定化し、豊かで潤いのある河川環境を創出します。

このように留萌市発展の核となる留萌ダムは、長い調査段階を経て、いよいよ建設事業に着手しようとしています。





千望台より留萌市街を望む

“川と暮らし 川に学ぶ”

流域を育んできた大地、なだらかにそびえ立つ山々は、大古の昔より洪水を初めとした数々の自然の猛威を積み重ねてきました。人間は、その時代の流れのわずかな瞬間を覗いているのです。

昭和56年8月洪水は、“未曾有の大洪水”と言われながら、月日の流れとともにその激しさ、恐しさはもとより、人間の生命の源ともいえる「水」そして「川」の存在すら忘れつつあたのです。

“川と暮らし 川に学ぶ”

今後も忘れることなく、次世代へ伝えていかねばなりません。